



# 日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page: http://www.nichiro.org

〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



## 新会長挨拶

服部 文男

特定非営利活動法人・日口交流協会会長の服部文男（はっとり・ふみお）と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。

日本とロシアの交流はロマノフ王朝時代から始まり、300年以上の歴史があります。当協会も発足以来皆様のご支援ご協力を賜り60年近く歴史ある団体として、日本とロシアの文化交流を鋭意推進して参りました。

近年、多国間で政治・外交・経済などに不安定な状況にあります。当協会は発足以来、政治・外交などに関与せず、またこれらの影響にも左右されず、両国市民の草の根的な民間交流が最も大切な柱と考えております。

ある統計によりますとロシア市民の多くは日本に好感をもっておりますが、日本側ではロシアに対し好感を持つ人は少ないとされています。

しかし、多くの日本人はロシア人には好感を抱き、また旧ソ連邦にあった国々の人達とも友好的な文化交流を望んでおります。

私が知るロシア人の皆様は争いのない平和を望んでいられると思われ。不幸な争いにある情勢においてこそ、政治、外交の影響に左右されない日本とロシアの草の根民間交流が特に大切と考えております。

私はロシア語圏で働いた方々と違い、趣味で旧ソ連邦の国々を旅し、ロシアに興味を持ち続け、当協会の会員として30年近くになります。ロシアとの交流史、文学、文化、芸術、ロシア語等に触れ、ロシアを訪れ、ロシアをよく知ることから相互の理解が深まり、心触れ合う本

### お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

服部文男氏、内堀學氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先:郵便口座 00160-9-66486、加入者:日口交流協会  
連絡先:日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org  
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752



当の交流ができるものと確信しております。

また、日本とロシア両国市民間の今後の交流をさらに深め、継続していくためには、若い世代の交流活動が必要です。当協会が実施しているロシア各地への日本伝統文化の紹介等をおこなっている交流団の派遣、国内でのロシア人との交流イベント、ロシア語教室、留学などに是非多くの若い皆様もご参加いただき、未来につなぐ日口交流を推進させていきたいと思っております。

会員の皆様、日本及びロシアの関係団体、ロシアにご関心の皆様、併せて日口両国大使館・総領事館の交流ご担当の皆様、今後ともご支援・ご協力をお願い申し上げます。

**主な経歴:** 日口交流協会副会長、運輸省（現国土交通省）、財団法人・部長、技術士（建設部門）

2011年6月ロシア連邦文化科学協力庁長官より、長年にわたる日口の交流親善に貢献したことが認められ感謝状受賞

### お知らせ

#### ●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜 初級1A-1 (19:00~20:00)

初級1A-2 (20:05~21:05)

土曜 上級 (10:00~11:30)

オンラインクラス月曜 準中級(18:00~19:00)、

日曜 ゼロからクラス(18:00~19:00)

日曜不定期「ロシア語の泉」 13:30~16:00

\*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、手洗い等、感染の予防にご協力お願いいたします。(緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。)

ベテランの講師陣が皆様をお待ちしております。

コルド・ナターリア、イローナ・パルフェノワ、ウラジーミル・ボロビエフ、タチヤナ・スニトコ

\*見学もできます。変更等の場合もありますので、前もって協会事務局までお問い合わせください。

#### ●その他

留学生との交流、ゆかた講習会、職人訪問や体験等イベントを計画中です。ご希望などございましたらお寄せください。

E-Mail: nichiro@nichiro.org Tel:03-5563-0626

## ウズベキスタン便り

寺尾 千之

ウズベキスタンの昔話の一つ「サヒイとハシス」を、紙芝居(写真ご参照)にしたことがあります。翻訳は中島章子さん(元加藤九祚先生秘書、「春の喇叭」著者)、絵は渡辺寛成さん(日本語講師、2003年NORIKO学級に半年駐在)です。約3000字の翻訳文をA3サイズ12枚の絵に仕上げ、つくばエキスポプレス開通に伴い、2004年11月に終了した流山フェスタで、地元の子ども達に披露しました。

子どもの頃、多くの昔話に親しんだジョエバ・ショヒジャホンさん(NORIKO学級一期生)によりますと「サヒイとハシス」は、ウズベク人なら誰でも知っている昔話とのこと。「サヒイ」はウズベク語で「寛大」、「ハシス」は「欲張り」という意味で、登場する若者2人の名前を「サヒイ」と「ハシス」にして話してくれました。

昔々、サヒイとハシスは、砂漠をラクダで旅することになりました。欲張りなハシスは、サヒイの食べ物だけを食べて、なくなると、サヒイを砂漠に置き去りにしました。サヒイは仕方なく足元に生えていた草を食べ、飢えをしのぎました。ところが、その草は、動物の言葉がわかるようになる魔法の草だったので、夜、ぐったりしていると、2匹の亀の「少し行けば井戸も食べ物もあるのにね」との会話が聞こえてきました。やっとの思いでラクダに乗り、進んで行くと、亀の言葉通り、井戸と遊牧民の村があり、空腹を満たすことができました。

その後も、旅の途中で、サヒイはハ

シスに何度も苦境に立たされますが、その都度、つがいのカササギや、夫婦ネズミの会話から、金貨や特効薬のありかを知ることができ、助かります。ついには、王女様の目を治療したご褒美に、その王女様と婚約することになります。

幸運続きのサヒイの様子を見ていたハシスは、強引に魔法の草のことを聞きだしました。動物の言葉がわかるようになったハシスは「ちっぽけな生き物より大きな動物の方が、すごい秘密を話すに違いない」と、葦の原にある洞窟に身を潜め、動物がやってくるのを待ちました。明け方、やって来たライオン、虎、狼、狐は、人間の臭いをかぎつけ「こいつは自分から食べられにやって来たな」と、ハシスを洞窟から引きずり出し食べてしまいました、とさ。

「他人を思いやる心は良い結果に結びつく」という教訓が込められた話です。日本昔話にも似た筋立てはありますが、砂漠、遊牧民、ラクダなど、ダイナミックな風土や動物は描写されていません。昔話は、現地の子ども達には教訓を、外国人には文化風土の違いなどを伝えてくれます。ちなみに、ウズベキスタンで最も有名な昔話は「ズムラットとキムマツ」(2人の女の子の名前)です。ウズベク人なら全員「ある谷のはじっこにある小さな家に、おじさんとズムラットが…」と切り出し、ハッピーエンドまで語り続けてくれることでしょう。(リシタン・ジャパンセンター事務局長)



## 特定非営利活動法人日口交流協会 新役員一覧

会 長	服部 文男	常任理事	日向寺淳一	理事	名島 薫
副会長	江守 元彦	常任理事	松本 泰男	理事	長谷川淑子
副会長	千葉 麻里	常任理事	水口 淳	理事	平野 元子
専務理事	内堀 學	常任理事	山岸ひさ子	理事	望月 繁
事務局長	島山 堅蔵	常任理事	山田 雄康	理事	山口建二郎
常任理事	岩本 智子	常任理事	横山 宣彦	理事	渡邊 絹江
常任理事	江本 大輝	理事	秋元 淑信	監事	吉田 臣吾
常任理事	岡崎 好典	理事	岩橋 和治	名誉顧問	栗原 小巻
常任理事	亀田慶一郎	理事	大矢 温	顧問	野崎 守二
常任理事	重松 和英	理事	笠原以津子	顧問	関根 徹
常任理事	滝波 秀子	理事	須田 毅	顧問	朝妻 幸雄
常任理事	中村 忠敬	理事	大道寺柳子		
常任理事	中村 泰弘	理事	武川 覚威		
常任理事	野口久美子	理事	土屋 正彦		

(以上 計39名)

コラム:

## ウオッカについて

島山 堅蔵

残念ながら、輸入が禁止となりましたが、ウオッカについて少し述べたいと思います。

## 1) ウオッカの歴史

ロシアでは1450-1470年の間に蒸留技術によるウオッカ(穀物ワイン)が存在していたとして、1982年国際調停裁判所にてウオッカの起源はロシアであると認められた。名前の由来は、ヨーロッパで発明された“蒸留技術”で生まれた酒を“生命の水”と呼び、この技術がロシアに伝達され、ロシア語で“Жизненная Вода (ジーズネンナヤ・ヴァダー)”のうち、“ヴァダー(水)”が残り、その指小形(愛称)として“ウオッカ”となったと考えられている。

## 2) メンデレーエフの学説

メンデレーエフは一般的には“原子周期表”を提案した人物として有名であるが、同時に“ウオッカのアルコール濃度を40度”に決めた人物としても有名である。(諸説あり)

## 3) ウオッカの国家管理の歴史

15世紀帝政ロシア時代イワン3世がアルコール飲料を国家管理にしたのが、ロシア史上初と言われている。これにはアルコール飲料が国家財政を豊かにするという考えが導入されており、現在に通じる考えだ。この国家管理体制は、1991年12月社会主義国家が崩壊する時まで続いた。1992年エリツィン大統領は国家管理を撤廃した。しかし、その結果全国には粗悪品、偽物ハードリカーが出回り、2000年にプーチンが大統領就任後、国家機能を高め、中央管理が再導入された。

## 4) ウオッカの飲み方

ソ連時代工場を訪問すると、必ずウオッカ宴会が待ち構えている。会場に着くとテーブルの上にはザクスカ(前菜と訳されるが、すきっ腹でウオッカは危ないので、たくさん飲めるように適宜腹に詰めるもの)が並んでいる。生野菜、チョーザメや鮭の燻製、ニシンのオイル漬け、牛タン、ピクルスなど。最初は誰かが挨拶をするでもなく、この前菜をおもむろに食べ始める。その後ホスト代表者が1分間スピーチをして、最初の杯を空ける。その後また前菜を食べ始め、適当な間隔(5-7分)で、日本側代表が1分間スピーチを行う。これを繰り返し、参加者全員が最低1回はスピーチを行うまで宴会は続く。

## 5) 結論

ウオッカの飲み方を知るだけで、ロシア・ロシア人のかなりの部分を理解出来ると思う。

40年以上経って漸く“ウオッカの一杯目はうまい!”というのが理解出来る程度で、実際ロシアは奥が深いと感じる。ロシア語では“По сошок (パサショク) 最後の乾杯”というのがある。しかし実際にはこの後にさらに続く以下の言葉がある。

— Стременная (ストレメンナヤ)、  
— Подорожная (パドロージュナヤ)、  
— Забугорная (ザブゴールナヤ) (上記表現はいずれも“よたよたと歩きながら帰る様子”を示しています。辞書には載っていません)

今回は“日本人のロシア語学習歴について”です。(事務局長)

## 半世紀前のソ連訪問—「函館市民の船」

倉田 有佳

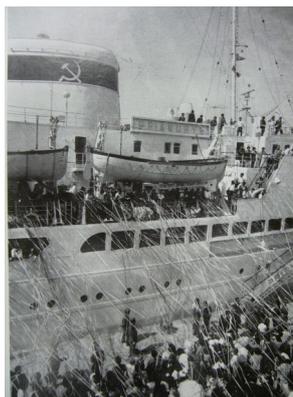
2022年は、函館・札幌・小樽・旭川・室蘭・釧路の道内6つのまちがそろって「市」となって100年を迎える。

今から半世紀前の1972(昭和47)年、函館市は市制施行50周年事業として「函館市民の船」を実施した。きっかけは、その前年、経済訪問団としてソ連を訪問した商工会議所関係者たちが、今後ソ連と経済関係を強化していくためには、まずは市民レベルでの交流を図ることが必要だと市長に説いたことにあった。「函館ドック」(現函館どつく)でソ連船の建造・修理を頻繁に行うようになるのは、昭和50年代のことである。

1週間の日程でナホトカとハバロフスクを訪れた「市民の船」の様子は、「函館市民の船実行委員会」がまとめた16ミリフィルム(カラー・36分)や、同行記者を派遣した北海道新聞の記事からたどることができる。

6月6日、矢野市長を団長とする約280名の市民団は、おそろいの濃紺のショルダーバックを肩にさげて中央ふ頭に集合した。札幌からバンドゥーラ総領事(※)がかけつけ、祝辞をいただいた。高校のブラスバンドが高らかに演奏する「イエロー・サブマリン」と2000人を超す市民の見送りを受けながら、ソ連船籍の「ブリアムーリエ号」(チャーター船)は出航した。真っ白い船体に五色の紙テープが美しく映えた【写真】。

船内での1昼夜は「大人の修学旅



行」しながら、慣れぬナイフとフォークを使つての洋食、サロンでの歌と踊り、デッキでの遊戯等で楽しく過ごした。

翌日の夕刻、ナホトカに到着。岸壁には、スズランの花束を手にした50名ものピオネールが待っていた。すぐ近くの「Тихоокеанская (太平洋) 駅」まではバスで移動し、ハバロフスク行き夜行列車に乗車。翌朝、小雨が降るハバロフスク駅に到着した。

3日間の滞在中、アムール川沿いの「文化と休息の公園」散策、アムール川遊覧、市民交流の夕べ、学校や「 Gum」百貨店訪問、サーカス見学などが用意され、各所で盛大な歓迎を受けた。最終日のサッカー交流戦では、函館選抜チームが現地の「ディナモ」チームに大敗するが、親善試合ということで双方に1点ずつ加算され、8対1という結果に終わった。

「市民の船」の記録映像には、好奇心あふれる戦後生まれの若者、アムール川で凧あげをする夢を叶えた高校教師、抑留中にコムソリスクの病院で亡くなった長男の墓捜しを目的に参加した女性の姿や、「23年前に4年ほどいたことがある」、と婉曲的に語る抑留体験者の声などが納められている。

ソ連との関わり方や参加動機は様々だったが、ソ連を実見し、草の根レベルで交流することの重要性は共有され、翌年8月の「市民ジェット」(「市民の船」参加者によって組織された「日ソ友好函館市民の会」と市青年会議所が主催。130人がチャーター機でハバロフスク・イルクーツクを訪問)へと受け継がれていく。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授) (※) 島田頭「ニコライ・バンドゥラ」(『日口交流』2018年12月 第282号) 参照。

## ワルツ王ヨハン・シュトラウスとロシア (3)

畔上 明

1859年9月半ばにヨハン・シュトラウスがオリガの母親と会ってからというもの現実的で堅実な母親から反対され、翌60年の年明けにオリガはウィーンのシュトラウスに宛てて他の男性と結婚することとなった旨の手紙を書きました。

シュトラウスがオリガに付けたあだ名「いたずらっ子」をその手紙に用いて「私にはあなたの思い出を消し去ることは出来ません、でも、不誠実ないたずらっ子のことは忘れて下さい」としたためています。シュトラウスは、「ポルカ・マズルカ・いたずらっ子 Op. 226」という曲を作りオリガのあだ名をここに残しました。

パーヴロフスクでの「ロシアの夏」のコンサートは、その後も脈々と続いていくことになり、ヨハン・シュトラウスにとっては財政的に大いなる助けとなりました。結局1856年から65年までの10年間に亘って毎年ヨハン・シュトラウスはサンクト・ペテルブルクを訪れることになったのです。

1869年には弟ヨーゼフ・シュトラウスと2人でロシアを訪れ、ヨーゼフをヨハンの後継者としてその仕事を引継いでもらうのでした。

1872年にもパーヴロフスクからシーズン最初のコンサートを受けてほしいとの依頼が入るのですが、その時はより有利な条件でボストンからの招待が入っていたこともあり、ロシアから徐々に遠ざかってしまいます。1877-78年には露土戦争、1881年にはアレクサンドル2世の暗殺テロが勃発。

1886年は、ヨハン・シュトラウスにとってサンクト・ペテルブルク最後の訪問の年となりました。



1971年ソ連制作ヤン・フリード監督映画「ペテルブルクとの別れ」

パーヴロフスクで行われた彼の最終コンサートから既に17年もの歳月が経っていました。この時はロシア赤十字協会と子供のための慈善団体の招きによるもので、久しぶりのロシア訪問は往時のシュトラウス・フィーヴァーを復活させ、指揮者であり作曲家であるシュトラウスの肖像画やフィギアなどが店に並び、果てはシュトラウスの絵の付いた「シュトラウス・シガレット」といったものまでが製造されました。チャリティー・コンサートは、騎兵隊の乗馬学校が会場として使われ、80人編成の帝室ロシア歌劇場管弦楽団によって演奏された曲目は、5-60年代パーヴロフスクに於いて馴染みとなった作品に加え、近作のオペレッタ「ジプシー男爵」(1885)からポルカとワルツ、そして、会場に因んで近衛騎兵に捧げられた曲「騎兵隊行進曲 (ロシア行進曲) Op. 426」が作られたのでした。

ヨハン・シュトラウスが初めてサンクト・ペテルブルクを訪れてから丁度30年という年数の経過は、3歳年下の作家レフ・トルストイにとってはクリミア戦争から帰還してサンクト・ペテルブルクの文壇の中に入り込んだものの肌合

ず、田舎へ引っ込んで農業や教育活動を行い、そして「戦争と平和」、「アンナ・カレーニナ」といった大作を執筆、藁による兵隊、音楽を奏で歌を歌うばかりの兵隊を描いた非暴力反戦を力強く痛烈に謳った「イワンの馬鹿」を発表したのが1886年でもありました。

ロシア軍のウクライナ侵攻にこころ痛める私たちにとって、武器ある世界の廃絶を祈り、暴力とは無縁の文化交流こそが本来の国際間の平和的なつながりのあり方であると思わしく思うのです。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)



## 22年1月相撲観戦

千葉 麻里

2022年1月15日(土)、毎年恒例の国技館での相撲観戦にでかけました。ロシアの方は44名。お子さん連れの家族で見に来ている方々もいて、賑やかでした。いつもながら、本格的なカメラを携えている方もいました。

協会からは、中村泰弘常任理事が、毎回、取り組み表などをロシア語になおして持ってきてくれています。皆さん、それを参考に馴染みの力士が出るのを待っていたり、どこの出身か比べてみたりしていました。

岩橋理事は、相撲観戦は何十年ぶりだろう、と以前きたときとはいろいろと違っている国技館のようすを解説してくれました。

協会からの日本人は3名のみ。この企画も回数を重ねて、相撲観戦は初めてではないという人も多く、質問はずいぶん減りました。華やかな土俵入りのようす



や、仕切りから立合いなど楽しんでおり、以前のように、「あの旗は何か」「行司は何を叫んでいるのか」などといった質問もなくなりました。むしろ、相撲にあまり詳しくない私も困るような、決まり手についての質問なども出て、今後は少し予習が必要と思いました。

ロシアでも相撲のファンは多いようです。これからはロシア出身の力士が増えてくれるといいのですが・・・

静かに見るなんて、とだれかが言っていました。以前のように大声で思いっきり応援できるように早くなってほしいものです。また、現在の情勢で、安全の点も考慮し、今年は第2回目の五月場所の観戦を中止せざるを得ませんでした。だれでも公に楽しめるようになることを願っています。(副会長)